

つなぐ「愛の手」

里親ケースワーカーのまなざし ②

家族になるということ



イラスト・竹内永理亜

くのか?」。養母が天国に行く自信があることを告げると「僕も天国行くわ。待つといてよ」と答えました。幼いなりに「なぜ生まれてきたのか」「自分にとって親とは」などと考えていたのだと養親は確信したそうです。養母は精いっぱい生きてほしいと思い「命を大切に、人生をゆつくり楽しんでね。お母さんはいつまでも待っているから」と伝えると、「うん。約束だよ」と返しました。この家族と関わり、告知は「生みの親ではない」「血縁がない」と告げることで

命の対話重ねて人生を共に

「今から新幹線で帰るところなので、その前にお会いしたい」。2歳の時、愛の手運動で里親家庭に迎えられ、その後養子となったKさん(39)から10年ぶりの連絡がありました。養母が亡くなり、葬儀の帰りでした。

初めて養親宅で半日過ごした彼の感想は「大きなおうちだった!」。養親も「マンション全部を家と思っただのかな」と笑って報告してくれました。Kさんと養親との人生の始まりでした。

里親や養親は子どもの成長とともに「家族の成り立ち」を知らせる、すなわち「真実告知をすることが求められます。Kさんの養親は幼稚園の頃からそのことに少しずつ触れ、Kさんからは「分かっている」とだけ返ってきました。

小学2年の時、本当の理解の始まりがあると考えた養親は、自分たちが生んだのではないけれどお父さん、お母さんであることを改めて話し、「家族になれ

てうれしい」と伝えました。以前とは違い「やっぱり…:赤ちゃんの時の写真もないと思っていた」と言い、少し黙り込みました。

養親は生みの母について話しました。まだ若く育てることができなかった、家族の助けを得られなかったと。Kさんは何も言わず、自分の部屋に行きました。

数カ月後のある夜、Kさんが養母に「お母さん、人間は絶対死ぬの?」と尋ねました。「お母さんは僕より先に死ぬね」「天国に行

はなく、「人生を共にし、語りあう関係を作ること」でもあると思えました。

Kさんは今回、養親になげてもらったお礼と、養親が自分にとって無二の親であることを伝えるに来てくれたのです。私はKさん以上に、養父母こそ「親子になれた縁」に感謝して人生を共に送ってきたのではないかと思います。

(家庭養護促進協会主任ケースワーカー・米沢晋子) ◆今回は11月7日に掲載します。